

緒立C遺跡範囲確認調査報告書



1 9 8 7

黒埼町教育委員会

序

昭和27年緒立八幡宮の境内から発見された1個の壺形土器によって、その存在が知られた緒立遺跡は、その後たび重なる発掘が行われ、昭和61年度には緒立C遺跡の確認調査を実施しました。

黒埼町も近年特に開発が進み、造成工事等がおこなわれるたびに、自然堤防上など遺跡が立地している可能性がある地点については種々の調査をしております。特に、今回の調査では古墳時代や平安時代の遺物が相当量発見され、資料分析がまたれるところでもあります。また、以前に調査された資料についても漸次整理することによって緒立遺跡の全容が順次明らかになってくるものと考えられます。

調査に際しては、県教育委員会文化行政課をはじめ、新潟市当局・地元関係者各位、それに発掘作業に従事して下さった地元有志の方々に対し、心から感謝申し上げる次第です。

黒埼町教育委員会

教育長 宮 田 兼 好

例 言

1. 本報告書は、新潟県西蒲原郡黒埼町大字黒鳥字川根湯5474番地他に所在する緒立C遺跡の範囲確認調査報告書である。
2. 確認調査は、黒埼町教育委員会が国庫補助金ならびに県費補助金を得て実施した。
3. 確認調査は黒埼町教育委員会が主体となり、昭和61年11月4日～11月14日まで実施した。
なお、調査体制は下記の通りである。

主 体	黒埼町教育委員会	教育長	宮田兼好
担当者	新潟県教育庁文化行政課	文化財主事	和田寿久
調査員	新潟県教育庁文化行政課	文化財専門員	池田敏郎
事務局	黒埼町教育委員会	社会教育課係長	池乗清市郎
		社会教育主事補	野田 能

4. 調査には新潟県教育庁文化行政課をはじめ各方面の協力を得た。
5. 確認調査における出土遺物は一括して黒埼町教育委員会が保管している。
6. 本書表紙の航空写真は新潟流通センター卸事業協同組合のものを複写したものである。
7. 本書は和田寿久、池田敏郎、野田能が分担執筆した。

I 調査に至る経過

今回の確認調査は、昭和59年1月に的場・緒立土地区画整理組合設立準備発起人会によって土地区画整理事業計画が提示されたことに始まる。開発予定地内には古墳時代・平安時代の遺物を出す緒立C遺跡（周知の遺跡）があり、その取扱いについて県教育委員会および開発事業者と協議をした。しかし、遺跡の規模や内容については地表観察のみでは判断できず、範囲確認調査をし、詳細なデータを得る必要性があった。開発にあたっては、確認調査の結果にもとづいて再度県教育委員会・町教育委員会・開発事業者の3者で協議することとした。

確認調査にあたって、町教育委員会は、県教育委員会に対し、種々の指導をおおいだ。調査主体は町教育委員会とし、県教育委員会から調査員として職員を2名派遣して頂くことになった。調査時期は用水・排水とも最下位の時期である9月上旬頃が最良と考えられたが、冷夏の影響により稲刈時期が大幅に遅れたため11月4日から11月14日までの10日間の予定で実施することにした。

町教育委員会は事前に発掘調査用具の調達、土地所有者の了承を得て11月4日から着手した。

補助金については昭和61年4月20日付で国庫補助金交付申請書を提出し、同年7月10日付で国庫補助金交付決定通知を受ける（国庫補助金額は500千円）。昭和61年7月19日付で県費補助金交付申請書を提出し、同年8月18日付で県費補助金交付決定通知を受ける（県費補助金額は250千円）。そして町負担250千円で、総計1,000千円で事業を実施した。



第1図 遺跡遠景（北より）



第2図 遺跡遠景（南西より）



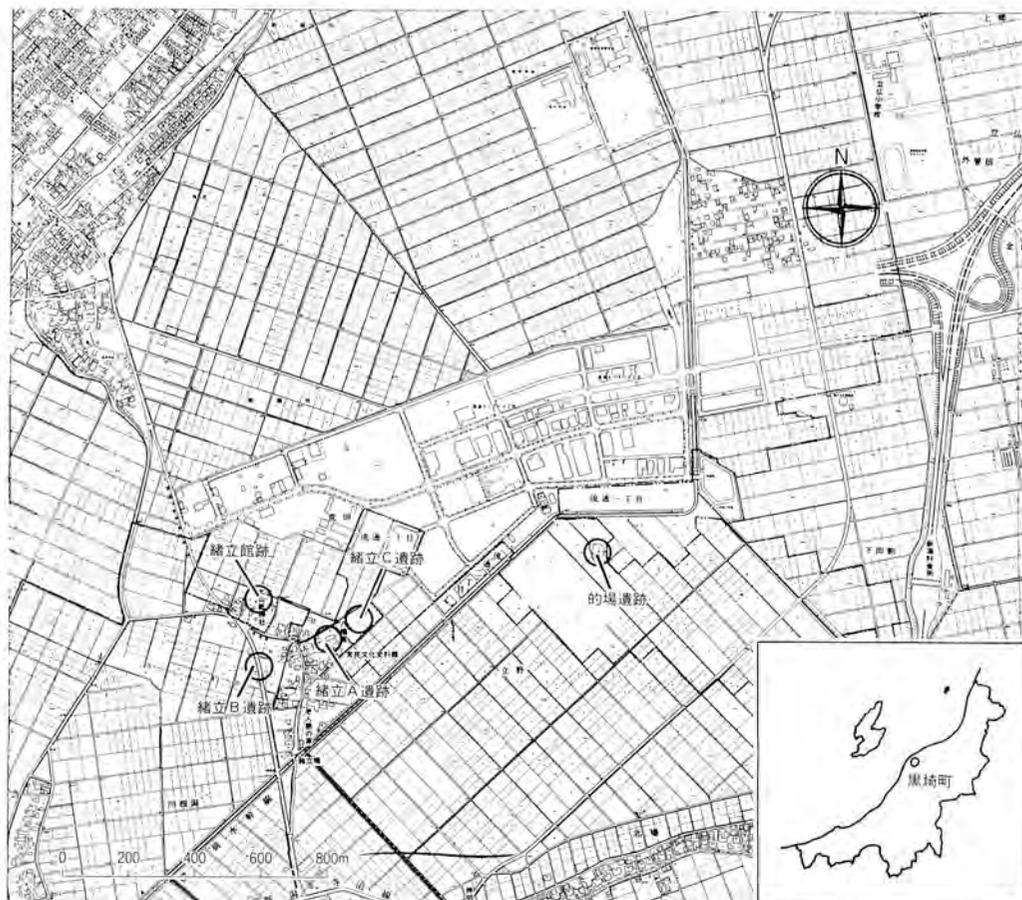
第3図 作業風景（南西より）

Ⅱ 遺跡の位置と周辺環境

標高20m前後を測る新潟砂丘の背後には、信濃川やその支流である中ノ口川などによって形成された自然堤防と後背湿地が広がっている。黒埼町は西川と中ノ口川にはさまれた堤間低地で、ほとんど標高1m以下の平坦な地形を呈している。かつては数多くの潟湖が存在していたが、今では完全に干拓され水田地帯となっている。

本遺跡は西蒲原郡黒埼町黒鳥字川根潟5474～5486番地に所在し、標高-0.7mを測る。現在は畑地・水田として利用されている(表紙○印)。

調査対象地の南西には、5世紀初頭頃の古墳と推定されている**緒立A遺跡**、縄文時代晩期から平安時代の集落跡である**緒立B遺跡**と続き、北東約0.7kmの地点には中世の館跡と推定されている**的場遺跡**が存在している(第4図)。いずれも埋没砂丘上に立地している。



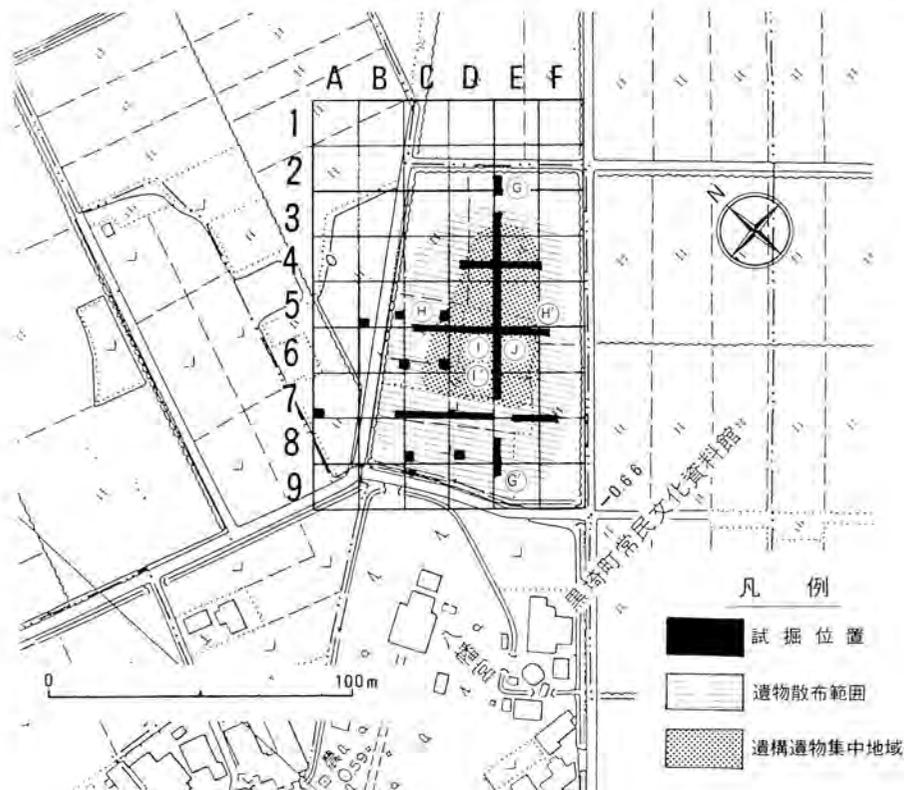
第4図 位置と周辺の遺跡

Ⅲ 確認調査の概要

1. 調査の範囲と経過

調査は八幡宮の東側、農道に囲まれた範囲（面積 12,150㎡）を主対象地として実施した。グリッドの主軸は黒埼町常民文化資料館東側の農道十字路を基準にして、一辺15mのグリッドを北東へ9個、北西へ6個設定した（第5図）。北東から南西ラインには算用数字を、北西から南東ラインにはアルファベットを付し、1 A・2 A・3 Aと呼称することにした。

調査は重機を用い、2～9のEライン、4のD～Eライン、6のC～Fライン、7のB～Fライン、にトレンチを設定し、基本層序を把握した。5～6のEで古墳時代・平安時代の遺物包含層（黒褐色砂質土）が確認され、北東および南西方向に下降して行くことが判明した。また6のC～Fラインにおいても5～6のEを中心に南東および北西方向に下降することが判明し、遺構・遺物の集中地域が明確になった。この他にも要所に試掘グリッドを入れ、遺物の分布状態の把握に努めた。各地点とも湧水が激しいため、遺物包含層の分帯はできなかった。また、6 Eでは遺物包含層を切って中世の土坑が2基検出された。実質試掘面積は480㎡である。



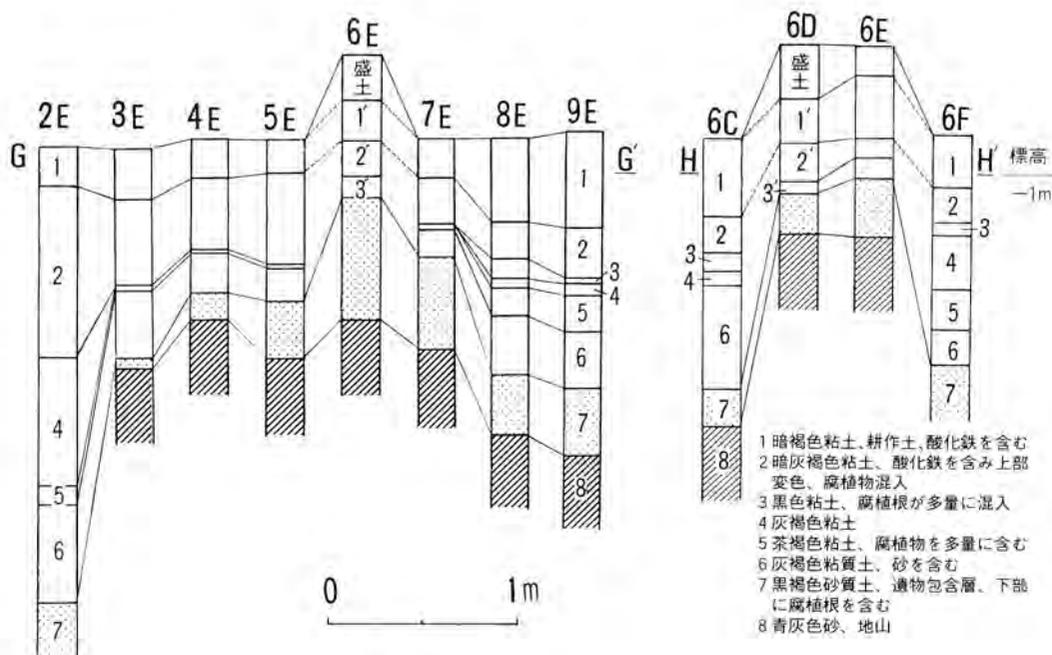
第5図 グリッド設定及び遺跡範囲図

2. 層序 (第6図)

本遺跡の基本層序は、第1層耕作土と第8層青灰色砂(地山)との間に、粘土層及び泥炭質腐植層が堆積しており、緒立B遺跡(黒埼町教育委員会 1979, 1981)の層序と同様な状態であった。なお、4～6D・Eグリッド及び8・9B～Dグリッド付近では、第1層上に盛土が施されている。

遺物包含層は第7層の黒褐色砂質土で、縄文時代晩期から平安時代までの各時代の遺物を含むが、層位の細分は不可能であった。第7層は平均30cmの厚さを持ち、5B・7Aグリッドを除くすべての試掘グリッド・トレンチで検出された。特に調査区中央では第7層・第8層の標高が高く埋没砂丘の丘頂部と考えられる。6Eの土層柱状図で第7層が厚いのは遺構部分にあたるためである。また、第7層は5～7Eトレンチ付近から北西と南東に傾いており、調査地区両端でその上面の深度は地表から1.5～2m、標高では-2mを越えるようになる。傾斜は北西側が緩く、南東側で急になっており、汀線側に緩く、内陸側に急な現砂丘列の横断面形に類似した形態になっている。一方腐植物を多量に含む第3層・第5層は調査区の南東、内陸側に発達しており、内陸側が湿地または潭水地域であったことを物語っている。

遺物包含層である第7層の埋没状態から、本遺跡周辺は古墳時代頃から相対的に沈降しはじめ、平安時代以降急速に埋積されていったものと考えられる。



第6図 土層柱状図

3. 遺 構 (第7・8図)

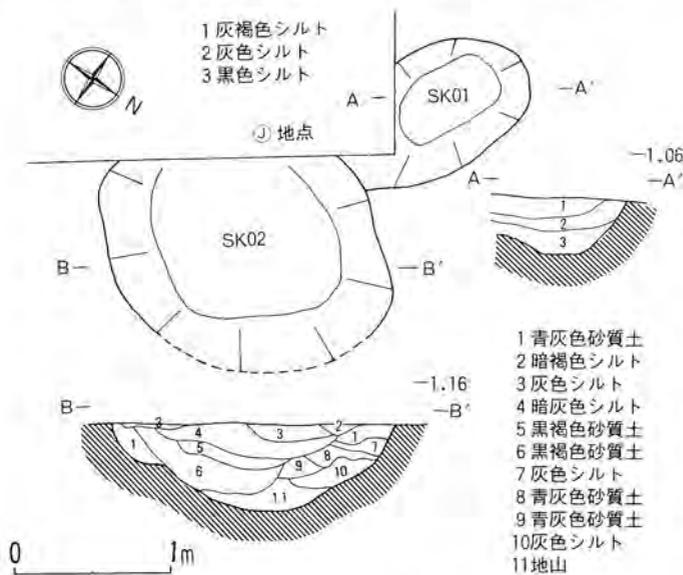
調査範囲の中で検出された遺構は土坑2基と竪穴住居跡1基である。いずれも遺物包含層が厚く埋積し、標高の高い地点で検出されている。

土坑(第7図) 2基とも6Eの北側に位置し、遺物包含層である黒褐色砂質土を切って構築されている。覆土は粘性の強いシルト質で、中世の青磁片や箸が出土している。

SK01 1.3×0.8mの楕円形を呈し、深さ0.29mを測る。埋土は3層とも粘質土で炭化物を多く含んでいる。SK02によって切られ、14世紀の青磁片や木片が出土している。

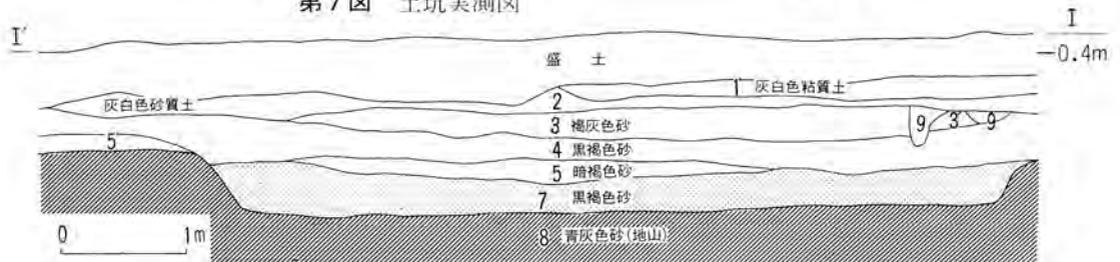
SK02 平面形は歪んだ円形を呈し、径約1.7m、深さ0.6mを測る。埋土は粘質土を主体に、砂質土がブロック状に混入する。加工痕のある板材と箸2点(第11図、6・7)が出土している。

竪穴住居跡(第8図) 6Eの北壁にそって、排水用の溝を深掘りした際に検出された。一辺6.5m、深さ約0.5mを測る。壁面はゆるやかにたちあがり、主軸は北西方向へ伸びる方形の



第7図 土坑実測図

プランと思われる。埋土の黒褐色砂質土は、包含層と色や質とも同じで、やや明るい暗褐色砂質土がレンズ状に堆積する。床面直上から古式土師器の壺や甕が多量に出土した。県内において一辺6～7mの方形住居跡は、緒立B・浜田・長峰・狐崎の各遺跡に発掘例がみとめられる。当住居跡も時期的に近似するものと思われる。



第8図 竪穴住居跡断面図(6E北陸、9層は褐灰色砂質土)

Ⅳ 出土遺物

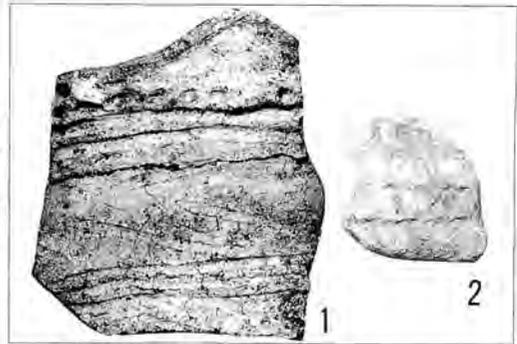
出土した遺物の総量は平箱5箱で、縄文土器・古式土師器（壺・甕・高杯・器台）・須恵器（杯・蓋・横瓶）・土師器・木製品等である。このうち古式土師器が全体の約 $\frac{2}{3}$ を占める。

1. 縄文土器（第9図）

縄文時代晩期の土器片が2点出土している。

1は緩く外反する波状口縁の深鉢で、頸部から胴部にかけてはややふくらむ。隆帯に刺突と小突起が付き、沈線で区画された間に綾杉文が充填されている。胎土には小礫が多く含まれる。

2は胴部片で網目状燃糸文が施されており、粗製で磨滅している。



第9図 縄文土器（約 $\frac{1}{2}$ ）

2. 古式土師器（第12、13図）

甕形土器（12図1・7～11、13図1・2・4～7） 実測可能な口縁部破片約70点のうち、甕は70%強、その内「く」の字に外反する口縁をもつ破片が95%と、高い数値をしめている。この口縁形態が主なタイプで、越後という在地色をうかがうことができる。

A類（12図1、13図1） 太く短かい頸部が屈曲し、直立気味に外傾する二重口縁で、内面はなめらかで段をもたない。推定口径27cm、球体状の体部と丸底にちかい底部がつくと思われる。器面はよく研磨されているが、外面の一部に横ナデやハケ目痕が残り、煤が付着している。類例の少ない大形甕である。

B類（12図7～11、13図2・4・6・7） 口縁が「く」の字に外反するタイプで、口縁端部の形態によって細分化することができる。B₁（12図9）、横ナデが強くつまみ上げが大きいもの。B₂（12図7）、B₁よりつまみ上げが少ないもの。B₃（12図8）、横ナデにより端部をつくりだし、つまみ上げの部分をヘラで調整したもの。B₄（12図10）、端部が丸く仕上げられたもの。B₅（12図11、13図11）、端部は丸く仕上げられ、鉢型の器形をもつ小形品に分けられる。口縁部はハケ目整形ののち横ナデされ、体部にはハケ目痕が残る。接合面は肥厚されたものが多く、内面は明瞭な段が観察できる。胎土には1～3mmの小礫を多く含んでいる。

C類（13図5） 口縁端部を指頭圧痕によって小波状にしたものである。接合面が明瞭で指頭により強化し、内面にもハケ目痕がはっきりと残る。推定口径16.4cmを測る。

壺形土器（12図2～6、13図3） 主として口縁部の形態で3分類できる。

A類（12図2・3） 口縁部下辺を肥厚させ二重口縁としたものである。2は短かい頸部から、ゆるやかに屈曲しながら外反していく。器面が荒れ砂粒を多く含む。3は頸部の屈曲度が強く内面に段をもっている。6 E出土で竪穴住居跡にともなう。

B類 (12図4) 「く」の字に外反する口縁をもち、端部は丸く仕上げられている。接合面は肥厚され明瞭な段と指頭痕が残る。体部上半に最大径がくるものと思われる。

C類 (12図5・6) 推定口径11～12cmを測り、約5～6cmの幅の広い口縁部をもつ。長胴の体部にやや外へ開く口縁部がつき、体部との境には明瞭なくびれを欠く。口縁端部は横ナデによって、強くつまみ上げられたものや丸く仕上げられたものがある。5の器面はヘラ磨き、6は斜位のハケ目痕が残る。内外面は横ナデ調整されている。

器台形土器 (12図16・17、13図15・17) 12図16は脚から受端部にかけて強く外反し、やや外傾する口縁部がつき、有段の受部をつくりだしている。受端部は横ナデによりつまみ上げている。欠損面には穿孔や赤彩箇所がみられるところから、雨(涙)滴形透穴をもった有孔装飾器台と思われる。穴数は6個と推定される。脚から受端部までの外面は黒色でヘラ磨きをしているが、他は内外面とも赤彩されている。胎土は緻密で焼成も良好である。12図17はラッパ状の脚部に、水平気味に開く有段の器受部がつくものである。接合面から上部が欠損し、内から外へむけて補修孔が2個ついている。受端部もきれいに横ナデ調整されている。

高杯形土器 (12図13～15、13図13・14・16) 赤彩された土器が多く7～8割をしめている。胎土は精選され焼成も良好なものが多い。12図14・15は脚部口径14～15cmで、基本的には円錐形からラッパ状に開く形態である。外面は赤彩されている。12図13は脚の中位に円形の三方透かしが穿孔されている。杯部の形態を知る資料は少なく、8個体分の破片が出土している。

甑形土器 (12図19、13図9) 上げ底状の甑の底部に、焼成後、外側から穿孔し甑として使用している。体部下半はヘラ削りで、内外面は斜位のハケ目調整をしている。

蓋形土器 (12図18、13図12) 体部が直線的にのびる笠形の蓋で、つまみ上面が凹む。外面はハケ目調整され、二次焼成をうけている。胎土は砂粒を多く含んでいる。

3. 須恵器・土師器 (第12図12・23～29、第13図18～26)

須恵器は出土量が古式土師器に次いで多く、蓋・無台杯・有台杯・横瓶などが検出されている。土師器は磨耗が著しく出土数も少ないため、図示できたのは小形甕2個体のみである。他に体部が砲弾型で丸底の大形甕と考えられる土師器の口縁部破片が出土している。

蓋 (12図23～26、13図23・24) 天井部が平坦で、屈折した体部を持つ24や25と天井部から口縁部にかけて傾斜している23や26がある。端部はすべて屈折して断面は三角形を呈する。内面はロクロナデにより滑らかである。23は宝珠様のつまみをもち、内面はロクロナデによる凹凸が顕著である。口縁縁辺部の外面に自然釉がかかり重ね焼の痕と思われる。24はボタン状のつまみを有し、内面には墨痕が残る。25と26の外面にも自然釉がかかるが、25の体部は剥落し、白色の斑状になっており、26は口縁縁辺部にかかっていることから重ね焼の痕と思われる。26の口縁部にはヘラ削り痕が見られる。13図の24は酸化炎焼成により橙色を呈している。

無台杯 (12図27～29、13図18～21) 底部はすべてヘラ削りで、体部の開きは小さく、器面はロクロナデにより滑らかである。特に内面は調整が丁寧である。29は底部ヘラ削り後、ロク

ロナデ調整し、体部下位はへら削り整形している。13図20は推定底径13cmで、底部のみ遺存している。へら切り後ロクロナデによる仕上げ調整され、「×」の刻印が施されている。

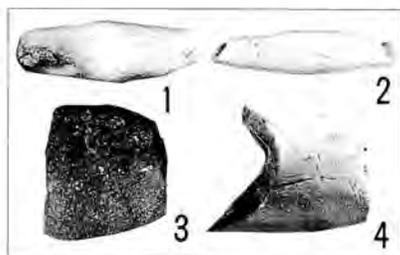
有台杯 (13図22) 高台径8.2cmを測る。高台内面はへら削り整形している。高台は「ハ」の字状に開き内端接地している。

横瓶 (13図25) 体部の約 $\frac{1}{2}$ を欠損し、口縁部・体部などにゆがみが見られる。頸部から体部にかけて平行叩き目、体部両端はカキ目、内面には同心円状の叩き目が施されている。緑色の自然釉が口縁部内外面や体部・底部にかけて厚くかかり、その一部は剥落している。

小形甕 (12図12、13図26) 26は完形に近い状態で検出された。体部・口縁部の外面にロクロナデによる凹凸がみられ、内外面の一部に黒色の炭化物が付着している。口縁部の形態は12図12に類似している。

4. 土製品 (第10図)

土錘が4点出土している。1・2は棒状の小型のもので、3・4が胴の張る大型のものである。すべて指頭によるナデ整形が行われている。3・4には指紋が残る。1は長さ4.5cm、最大径1.3cm、孔径0.6cm。2は長さ5cm、最大径1cm、孔径0.4cmである。



第10図 土製品 (約 $\frac{1}{2}$)

5. 木製品 (第11図)

S K 02より箸2点、5 B 南側グリッドの灰褐色粘質土より中世以降の曲物・櫛・下駄が出土している。いずれも日常生活用具が中心である。

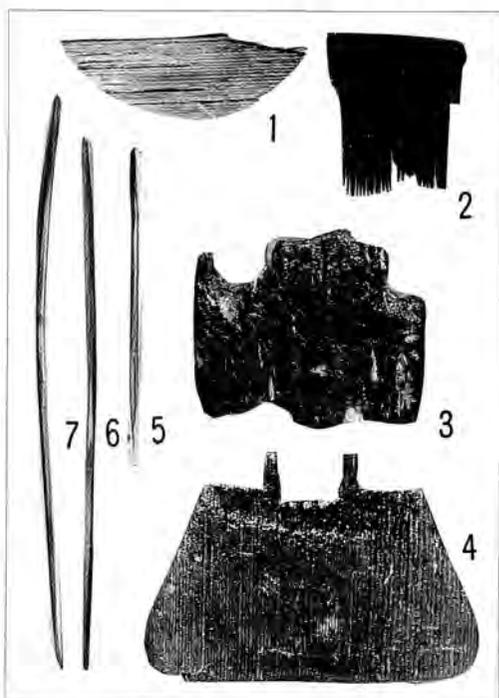
曲物 (1) 蓋ないし底板で、直径約12cm、木目にそって欠損している。

櫛 (2) 両端は欠損しているものの、隅切り半円形を呈すると思われる。全面に黒漆がぬられ、残存幅5.1cmを測る。

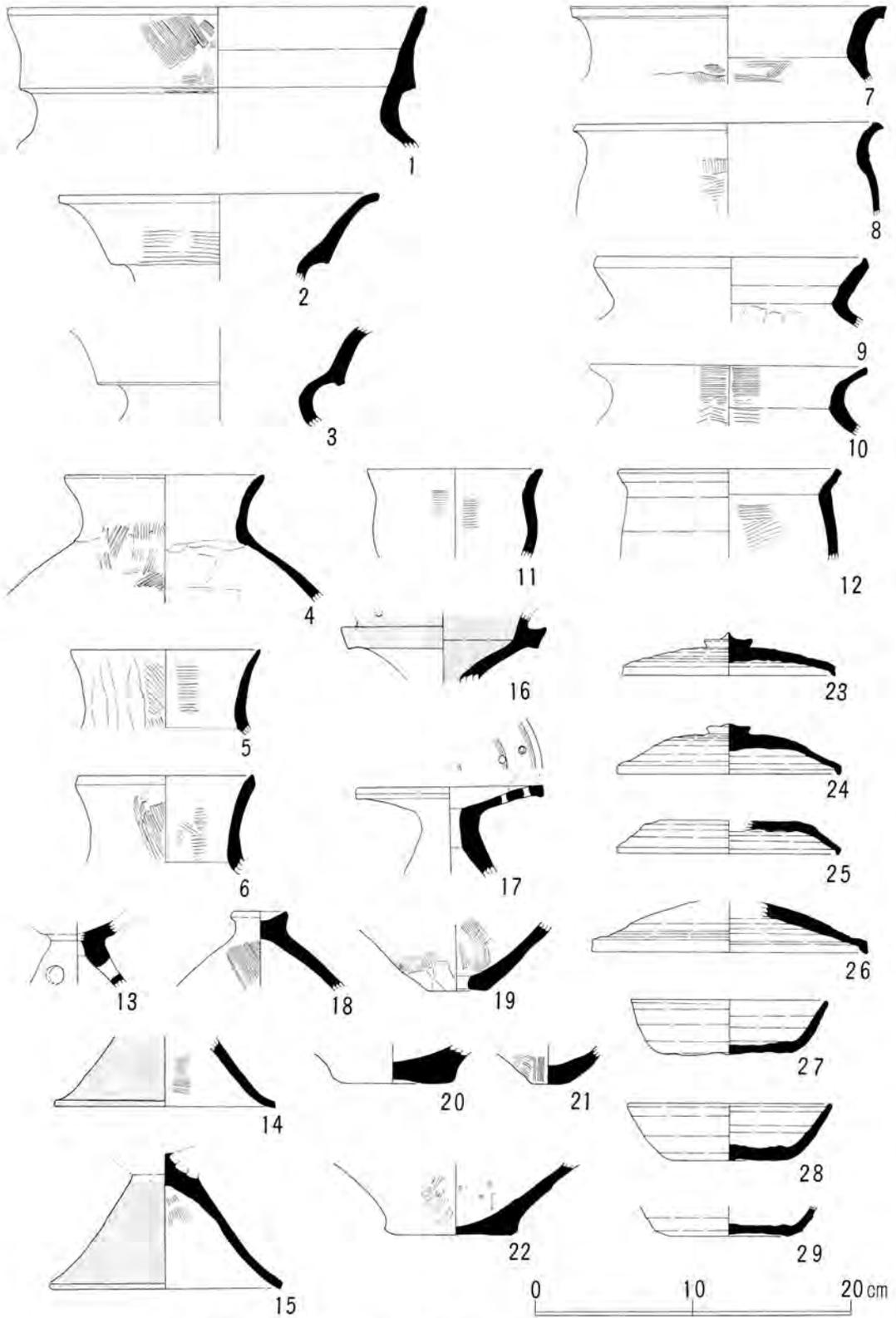
下駄 (3・4) 露卯下駄と下方に広がる「銀杏歯」の差歯である。3は幅9cm、厚さ2.8cmで杓穴がみえ、4の差歯と合致する。

箸 (5・6・7) 断面方形の材をつかい、角を全体的に削りおとし多面体をつくる。両先端部を削って先を尖らしている。全長21~23cmを測る。6・7はS K 02より出土する。

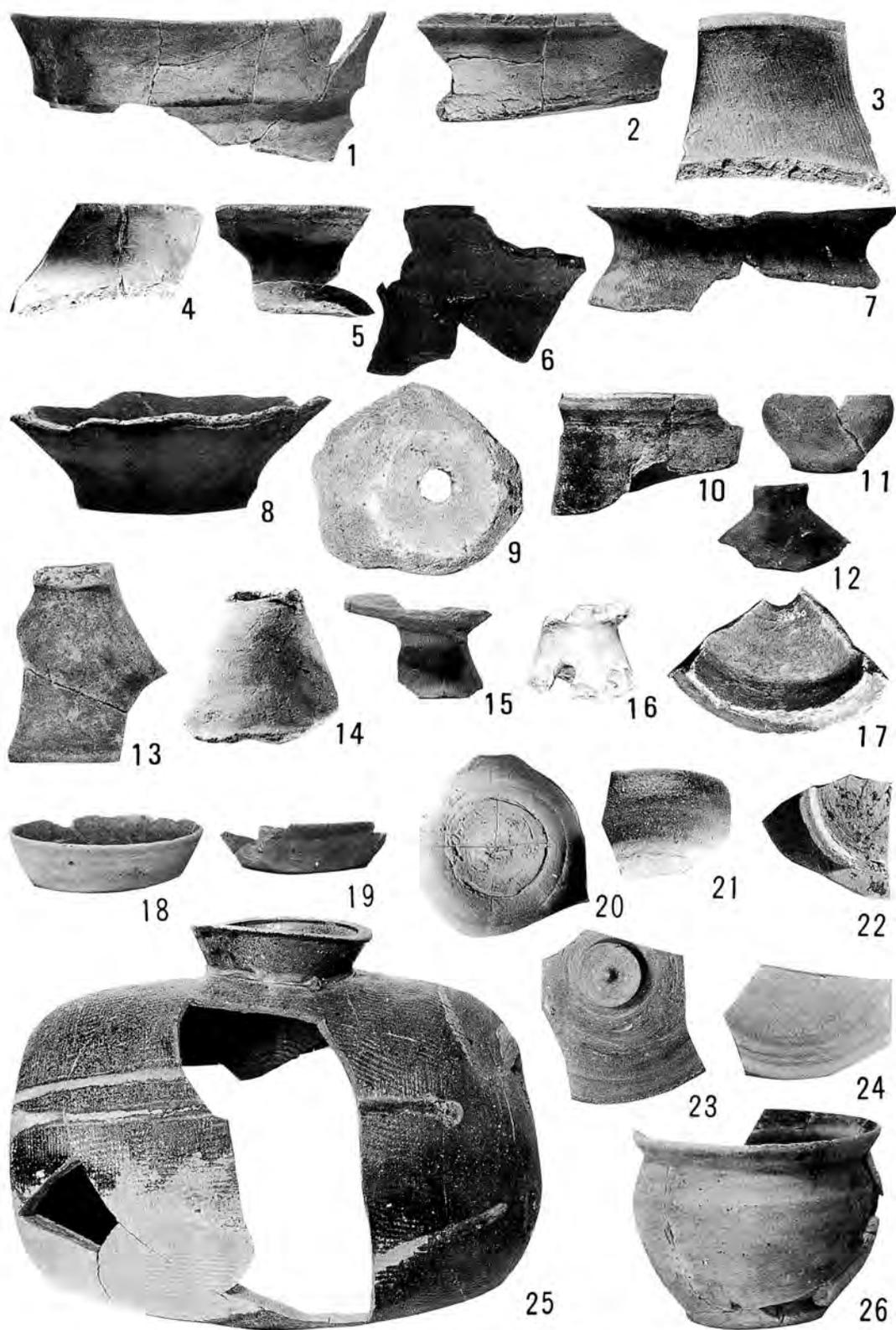
この他に櫛のようなものや加工痕のある板材などが出土している。



第11図 木製品 (約 $\frac{1}{2}$)



第12图 古式土師器・須恵器・土師器 実測図



第13図 古式土師器、須恵器、土師器（1・25・26は土、他はき）

V ま と め

緒立集落周辺の遺跡については、昭和30年代頃から発掘調査され、特に緒立B遺跡では古墳時代前期の竪穴住居跡や土坑が検出された。土器は縄文時代晩期から弥生時代初期にかけの過渡期のものや古墳時代前期の土器を主体とし、他に平安時代の須恵器、土師器が出土している。また、緒立A遺跡は5世紀頃の古墳と考えられている（黒埼町教育委員会、1982）。いずれも沖積地内の埋没砂丘列上に立地している。

今回調査の対象となった緒立C遺跡も沖積地内の埋没砂丘列上に立地していることが判明した。砂丘上には古墳時代前期と平安時代の土器を含む遺物包含層が良好な状態で検出された。しかし、遺物包含層を時代的に細分することはできなかった。特に、埋没砂丘は6E付近が一番高く、北東方向および南西方向に徐々に傾斜している。また、北西側（海側）は緩く、南東側（内陸側）は急な傾斜をもって埋没している。この高まりの範囲は東西約30m、南北約50m（第5図の上下方向）を測るものと推定され、中世の土坑や古墳時代前期の竪穴住居跡などの遺構が検出されている。また、遺物も良好な状況で発見されることから、この高まりは遺構、遺物の集中地域と把握される（第5図）。その外殻には遺物等が採集される遺物散布範囲（南北約90m、東西約60m）が広がっている。本遺跡の範囲は遺構、遺物集中地域を含めた遺物散布範囲で約5,400㎡となる。



第14図 遺構検出状態

遺物は古墳時代前期の古式土師器と平安時代の土師器、須恵器が主で、以前に調査された緒立B遺跡（黒埼町教育委員会、1979、1981）出土の土器と時代的に一致している。同一砂丘列上に同一時代の遺跡が点在し、本遺跡もその中の一つと考えられる。

参 考 文 献

- | | | |
|----------|------|--------------------|
| 黒埼町教育委員会 | 1979 | 『緒立遺跡第2次発掘調査実績報告書』 |
| 〃 | 1981 | 『緒立遺跡第3次発掘調査概報』 |
| 〃 | 1982 | 『緒立八幡神社遺跡』 |

緒立C遺跡範囲確認調査報告書

昭和62年 3 月 20 日印刷

昭和62年 3 月 25 日発行

発行 黒 埼 町 教 育 委 員 会

印刷 (株) 第 一 印 刷 所